様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　4 月 19　日現在

機関番号：　14101
研究種目：　基盤研究（C）
研究期間：　2010　～　2012
課題番号：　22592546
研究課題名（和文）　健康相談を足場とした在日日系ブラジル人母子のサポートシステムの構築に関する研究
研究課題名（英文）Building a Support System among Healthcare Providers: Counseling and Healthcare Service for Nikkei Brazilian Mothers and Children
研究代表者
畑下　博世（HATASHITA　HIROYO）
三重大学・医学部・教授
研究者番号：　50290482

研究成果の概要（和文）：在日日系ブラジル人母子は、出産から子育て期を通して利用する関連機関で、さまざまな困難に直面しており、我々は、個別の健康相談を通してケースに共通する困難を明らかにした。さらに、関連機関毎にどのような課題があるのかを明らかにした。母子サポートシステム構築に関わる主な機関は 5 か所（産科クリニック、市役所、保健センター、小児科、託児所）であった。また、これら各機関がポイントをおさえて役割を果たし連携することが必要となることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
Nikkei Brazilian mothers residing in Japan face various difficulties in using institutions that provide healthcare services for mothers and children. We offered those mothers private counseling and found out a common issue of the difficulties as well as problems at each institution. 5 institutions including Maternity Clinic, City Hall, Health Center, Pediatric department, and Nursery were playing important role in building systems and providing maternal and child healthcare services. In order to reduce difficulties of Nikkei Brazilian mothers 5 major institutions need to have functional role and work together in better collaboration.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：看護学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：地域看護学

１．研究開始当初の背景

（1）200 年 12 月のリーマンショックによる経済不況により A 県の外国人労働者数は減少に転じた。

（2）A 県の外国人登録者の中で、最も多いのはブラジル国籍であり、リーマンショック後も多くが日本に留まり生活している。

（3）特に女性は重要なライフイベントである妊娠・出産を日本で経験している。いかにこのライフイベントを乗り越えているのか、またこれら在日日系ブラジル人母子に対し、保健医療従事者だけでなく、各機関がどのような役割を担いサポート連携していくことができるのか、明らかにする必要がある。

２．研究の目的

A 県在住の在日日系ブラジル人母子が直面した困難について明らかにし、これらをサポートする保健医療従事者や行政機関の連携の在り方を提案する。

３．研究の方法

（1）研究期間：

平成 22 年 9 月～平成 24 年 9 月

（2）研究対象：

A 県のＡ、Ｂクリニックを受診しているブラジル人妊産婦で同意が得られた者 20 名

（3）研究方法：

日本人研究者とポルトガル語通訳者が２人１組となり、我々が作成したチェックシートに基づき日常生活や困っていることを確認しながら、産科クリニック・対象者の自宅・保健センター等で健康相談や参加観察およびインフォーマルインタビューを行った。フィールドでの記録を対象に生じた困難（躓き）の視点で内容を質的帰納的に分析した。

（4）倫理的配慮：

研究対象者に、研究の目的・方法・内容、個人特定を避けることに関する配慮、研究参加および中止についての自由の保障、資料及びデータの破棄方法について、ポルトガル語に翻訳した文書と口頭で説明し、同意書への署名をもって調査参加への同意とみなした。

なお、本研究は滋賀医科大学倫理委員会の承認を得て実施した。

４．研究成果

（1）研究期間中における全対象者数は２０名であった。

	年齢	在日期間（未満）	出産経験	日本語の理解度	労働状況
A	20	8 年	初産	簡単な日本語	派遣・日勤
B	38	5 年	初産	不可	派遣・日勤
C	26	3 年	初産	不可	派遣・日勤
D	26	6 年	経産	簡単な日本語	派遣・2 交代
E	24	8 年	初産	可	なし
F	30	6 年	経産	不可	派遣・日勤
G	36	10 年	初産	不可	なし
H	23	3 年	経産	簡単な日本語	派遣・日勤
I	20	6 年	初産	不可	派遣・夜勤
J	20	16 年	経産	可	失業中
K	20	8 年	初産	不可	なし
L	24	3 年	経産	不可	なし
M	23	15 年	経産	可	派遣・日勤
N	25	3 年	初産	不可	派遣・日勤
O	30	7 年	経産	可	ブラジル人学校教員
P	32	14 年	経産	簡単な日本語	派遣
Q	21	2 年	初産	簡単な日本語	派遣
R	29	4 年	経産	簡単な日本語	なし
S	30	3 年	経産	不可	なし
T	26	4 年	経産	不可	派遣

図１．対象者の概要

在日日系ブラジル人母子は、出産から子育て期を通して利用する関連機関で、さまざまな困難に直面していた。我々は、個別の健康相談を通してケースに共通する困難を明らかにした。その困難を「躓き（つまづき）ポイント」とし、関連機関毎にどのような課題があるのかを明らかにした。

≪妊娠期の躓き≫

①過剰な体重増加

多くのブラジル人妊婦は、妊婦健診で体重増加を産科医より指摘されていた。食文化として、糖分、脂質の摂取量が日本人に比べ多いことだけでなく、妊娠中は仕事もせず家にこもる傾向にあり、孤独から食への関心が高まってしまう環境に置かれていることがわかった。

②胎児の異常への対応

妊娠中期にハイリスクのため、かかりつけの産科医より他機関受診をすすめられたが、夫が仕事のため同行できず、また保険の未加入が発覚した例があった。さらに受診先では何種類もの日本語の自己問診票を手渡され、研究者と研究通訳者の協力を得てかなりの時間を費やし記入した。

≪出産期の躓き≫

①陣痛と産痛

陣痛開始が明確に理解できず、早めに入院してしまう傾向があった。また、日本人に比べ産痛に耐えることができにくい傾向がみられた。マタニティクラスの受講がほとんどなく、陣痛時の呼吸法等の知識も不足していた。

②分娩方法

ブラジルでは帝王切開が一般的である。自然分娩での痛みに耐えることは苦痛であると考える場合が多い。しかし、日本で自然分娩を経験し、痛みを共に耐えて生まれてきた我が子が愛おしいと、次の分娩も自然分娩を希望する例もあった。

③出産費用

経済的状況が厳しい家庭において、同居家族が母体の安全よりも経済状況を優先し、早期退院などの判断を迫る場合があった。

≪育児期の躓き≫

①育児困難

家族が仕事に出てしまい、サポートが得られない場合、児の世話に困難をきたしていた。母親のおむつ交換不足から、児の臀部にかぶれによる湿疹を生じさせている例があった。沐浴の習慣がない例もあり、育児の文化的相違がみられた。

②児の異常

先天性代謝異常検査で再検査となった例では、産科医による検査の目的や意味の説明が理解できず、混乱した家族の例があった。

また、児が股関節開排制限の指摘を受けたが相談できず困っていた例や、児の嘔吐に戸惑い、受診することもできずに困っていた例等があった。

③医療機関受診（小児科・総合病院）

児をインフルエンザの予防接種に連れて行ったが医療機関での問診票が難しく、記入が困難であった例や、児の発作症状に対しどの医療機関に掛かればよいいのか分からず、インターネットを介してブラジルの医師とやり取りし助言を得ていた例があった。

④乳幼児健康診査

ブラジルにおいての乳幼児健診は「身体的な成長が順調かどうか」を確認するためのものであり、日本の乳幼児健診において、保健師が家族や生活全般について把握することや集団健診というスタイルに戸惑う例があった。

⑤予防接種

母国は感染症罹患率が高いため、予防接種は受けたいと考えているのが一般的であるが、親が仕事を優先し、予防接種が受けられていない例もあった。

⑥就園（認可保育園・ブラジル人託児所）

無認可でブラジル人が自宅で子どもを預かる託児所が多く利用されている。親にとって、仕事の関係で朝早くから預け、夜遅くに引き取りに行ける融通性がメリットである。全く保育の知識も持たないものが経営している場合もある。多動など発達障害を疑うケースもあったが、日本の公的な専門機関が介入しにくい状況にあった。他に、ブラジル人学校、日本の保育園に預ける例もあった。

（2）躓きを最小限にする繋ぎ（ネットワーク）の構築

在日日系ブラジル人母子は各関連機関においてサービス提供を受ける際、共通する困難（躓きポイント）があった。これは在日ブラジル人母子の背景に共通する言語・文化の相違、境遇を根底とした母子の健康課題が、現在の日本における母子サポートシステムでは対応困難な状況にあると考えられる。このことから、各機関が在日日系ブラジル人母子のサポートを途切れさせることなく連携する工夫（繋ぎポイント）を必要とした。

≪妊娠期の繋ぎ≫

①母子手帳交付窓口となる行政は、保健センターと連携し妊娠期からの関わりを継続させる。

②行政（役所）には、経済的な問題等でブラジル人が訪れる場合が多いため、事務職員が最初に接する機会となることから、職員間の連携を取り、保健に関する相談の場合は確実に保健センターに繋ぐようにする。

③行政からの連絡を受け、保健センターは外国人妊婦をハイリスク妊婦と認識し、戸別訪問を行い、関係を築いておく。その中で、出産に向けての基本的な知識を伝えていく。

④保健センターは、ブラジル人の分娩が多い産科医療機関とは連絡を密に行い関係を構築しておく。また、産科医療機関看護師に、ブラジル人妊婦は母子手帳交付には保健センターを訪れることを伝えてもらうようにする。

⑤保健センターは妊娠初期～中期に栄養士と主に栄養指導を兼ねた料理パーティなどを開催し、体重増加、孤立を解消する機会を設ける。

≪出産期の繋ぎ≫

①産科クリニックでは、産後、退院までに必ず新生児訪問のはがきを送付するように援助することで保健センターに繋ぐ。

≪育児期の繋ぎ≫

①保健センターは、必ず新生児訪問を行う。家庭訪問から問題が引き出せ、解消できることが多い。

②保健センターは小児科と繋がっておくことで産後、児の発病時にも 速やかな受診行動がとれる。

③行政は小児科等の医療機関にアクセスしやすいよう、マップ等を紙媒体やインターネットにより情報発信する。

④保健センターは、ブラジル人母子が他の市町村へ転出した場合も、転出先の保健センターに情報を繋ぐ。

⑤小児科はポルトガル語の問診票を設置する。また、薬の服用方法対訳表も必要となる。

（3）全過程における通訳の必要性

ブラジル人母子は、日本で生活し保健医療に関わる上で、言語的問題を抱えていることは事実である。研究対象者となった母子は、本研究におけるポルトガル語通訳者を頼み

の綱にしていたことからも明白である。各関連機関に通訳を配置することが理想であるが、人材不足、経済的な面から現実的ではない。また、ポルトガル語通訳者だけでは把握しきれなかった医療的な説明や日本の制度の仕組みがあり、研究者と共に関わることでブラジル人母子の抱える問題が解消されたケースがほとんどである。これらのことからも、複数の、様々な立場の人材が関わることが重要であり、ネットワークを通して他職種が各自の役割を共通認識しながら、実行可能な範囲で協力し合う姿勢を持つことが重要となることが改めて明らかとなった。

既存の日本の母子サポートシステムを活用しながら、ネットワークを構築していくことで、サポート体制が整う方向性が明らかとなった。今後は、実践レベルでネットワークを構築し、在日ブラジル人母子の躓きを最小限にできるよう結果を出す必要がある。また、在日ブラジル人だけでなく、日本に在住するあらゆる国籍の母子をサポートするネットワークシステム構築に向けての展開を進めていくことが、今後の課題である。

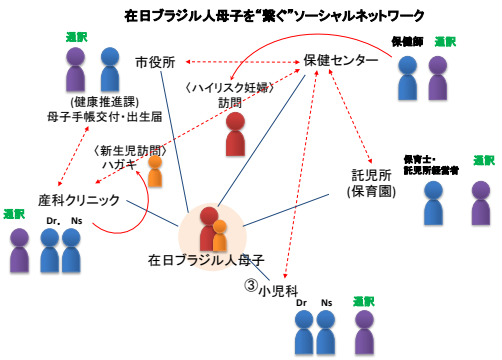

図２　在日ブラジル人母子を繋ぐソーシャルネットワーク

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）

第　回日本看護科学学会学術集会
発表者：マルティネス真喜子、畑下博世、植村直子、金城八津子
発表表題：「在日ブラジル人女性の周産期における“躓き（つまづき）”と保健医療の“繋ぎ（つなぎ）”」2012 年 12 月 1 日、東京

６．研究組織

(1)研究代表者

畑下　博世（HATASHITA HIROYO）
三重大学・医学部・教授
研究者番号：　50290482

(2)研究分担者

植村直子（UEMURA NAOKO）
滋賀医科大学・医学部・助教
研究者番号：90510347

金城　八津子（KINJYO YATSUKO）
滋賀医科大学・医学部・助手
研究者番号：20548193

マルティネス真喜子（MARTINEZ MAKIKO）
京都橘大学・看護学部・助教
研究者番号：10599319